

【研究エッセイ】
A ではなく B を選択してもらおう
ソフト戦略の思案
—待ち行列理論と行動経済学の力で
説得するための第一歩—

愛知県立大学情報科学部
奥田隆史

日本中の大学でオープンキャンパスが流行している。18歳人口が減少中であっても、真夏に開催されることとも関係があるのか、年々参加者数は気温同様、うなぎ上りのようなものである。真夏におこなわれている行事なのだから、どこかの大学が、“オープンキャンパス”と銘打つ可能性もあるのではないかと密かに著者は思っている。

オープンキャンパスに参加する高校生には、積極的にその大学のことを知りたくて参加している人もいれば、仕方なく参加している高校生もいるであろう。ただし前者ががっかりとするかもしれないし、後者がその大学が実は探していた大学だったとか、専攻したい学問分野はこれだとか、と気がつくこともあるであろう。つまりオープンキャンパスは後者の高校生に対してはセレンディピティの機会を提供したことになる。素晴らしいことである。なお「計画された偶発性理論 (Planned happenstance theory)」によれば、個人のキャリアの8割は予想しない偶発的なことによって決定されるらしい。偶然を計画的に設計する意味でも、高校生にはオープンキャンパスというイベントを有効に活用してもらいたいものである。実施側の大学も、オープンのように熱くならずセレンディピティや偶発的なことという側面を意識しても良いかもしれない。

ここで知人のある高校教諭がオープンキャンパスについて生徒に対して話している内容を以下の(1)~(3)に紹介しよう。

(1) オープンキャンパスにおいて、大学は原

則として良いところだけを見せようとする。それに見入るのも良いが、折角キャンパスに堂々と入れるのだから、その大学の日常や気風も見見るべきである。具体的には、学内掲示板と学生ファッションを見ることである。掲示やファッションはオープンキャンパスのために変えることはあり得ないので、その大学の日常、気風、学風が現れている。

- (2) 大学内の学内掲示には、大学側から教職員・学生へのメッセージとその背景にある考え方、その案件の重要度も含まれている。掲示の文面はその大学の知的レベル、気風を浮き出す。掲示の日焼け具合をみれば、大学の美的センスが現れる。具体的には学内の掲示に“何”が書いてあるか、それは“どのように／どんな文体で”書いてあるのか、そしてその掲示の“日焼け具合”はどうかということを見てきなさい。
- (3) オープンキャンパスには学生スタッフもたくさんいる。君たちの先輩となる候補者である。彼らはそろいのユニフォームとしてTシャツやポロシャツを着ている。しかし、それ以外のファッションに、その大学の学生の日常が含まれている。自分に似ている風貌の人を探せば、リアルに君の数年後の学生生活のイメージが想像できる。

この高校教諭は「オープンキャンパスでは **Open your eyes, wide!** 自分の目で“キャンパス内の掲示”、“学生のファッション”を見て、その大学の日常、気風、学風を感じてきなさい」と高校生に話しているのである。ちなみに『自由論』のジョン・スチュアート・ミルは、『大学教育について』で“大学が…影響を学生に及ぼすことができるとするならば、それは……大学全体にみなぎっている気風によるのです”と書いている。1865年の講演をまとめたものであるが、大学における気

風は今でも大事だと思う。

こんなことで大学が評価されては困るような気もする。しかし、オープンキャンパスの中味をどう評価するのか、あるいはオープンキャンパスをどう使うのかは、コンシューマーである高校生（最近では親御さんと来る生徒さんもいるから親御さんかもしれない）なのだから仕方がない。さらに、就職や共同研究の打ち合わせなどで大学に訪問する方も見ることになる。在学生も日本人学生だけという時代ではないから、外国人留学生も見る。短期滞在するような外国人留学生もいる。もちろん日本人学生も地元出身者ばかりではない。多様な人が彼らの価値観という基準で、“大学内の掲示”を見ている。そして感じているのである。掲示というレンズを通して、大学全体にみなぎっている“気風”までもが見られているといっても過言ではないであろう。

おまけに、あそこの大学内の掲示は、面白い！と SNS のサイトへ、写真が投稿されるという可能性も十分ある。それは規制もできない。あつという間に世界中に拡散していく。主体的にオープンにしていなくても、あらゆることが知らないうちに学外に向けてオープンになっていくのである。今のオープンキャンパスは行事としておこなわれている。しかし、現実はずっとオープンキャンパス状態なのかもしれない。

前述の高校教諭の話聞いてから、筆者は様々な大学の掲示を注意深く見るようになった。経験則であるが、どこの大学にも必ずといっていいほど、“**A を多くの学生が歩くと、近隣住民から苦情がきます。A を歩くのではなく、B を歩くようにしてください**”というパターンの掲示がある。ここで、A は歩道や道路右側で途中で信号などがある。B は歩道橋だったりする。このタイプの掲示に関しては、次の(1)~(5)のようなことが脳裏に浮かぶ。

(1) 大学としては、本当は申し訳ないとは思っていないのだろう。しかし、近隣住民

が言うから掲示するのだろう。この掲示を見た近隣住民は、自分たちが悪者にされていると思わないのだろうか。

- (2) 屋外の掲示は、日焼けなどで劣化しており、書いてあることが判別できないことがある。あくまでも掲示してあることが重要であって、その掲示による効果を求めているわけではないのではないか。今でも掲示に書かれている内容は有効なのだろうか。
- (3) 掲示があっても、大多数の学生は A を歩く。ある大学では登下校学生が多いときは警備員が、B へ誘導している。しかし警備員がいない時間帯は A をそのまま歩く学生が多い。掲示効果というよりも警備員効果ではないか。
- (4) A を歩くことは交通ルールの問題があるわけでない。“交通はある場所の内なる世界を垣間見せてくれる秘密の窓であり、言語、服装、音楽と同じような文化的表現なのだ。” [1] (p. 339~) という言葉があるから、よほど大学周辺には危ない人や車が出没するのだろうか。たしかに〇〇走りという、地域特有の走りがあって、全国的にも有名なものもあるが。
- (5) 堂山昌男さんの米国生活での体験を綴った書籍 [2] に書かれているエッセイ「青信号はゴーでない」を思い出す。米国にきたての知人（水野さん）が交通事故を起こした顛末話である（41 頁から 48 頁）。水野さんが警察官に、「私の進行方向の信号は青だった。だから進んだ。私は悪くない」という日本語をそのまま英訳して、“My traffic light was blue.”（私の信号は青かった）と言ってしまって起こった異文化体験である。米国では“隣の芝生は青い”の青は Blue でなく Green と言わなくていけないのと同じような話である。

アマノジャクでありプランBの好きな著者は“Aを多くの学生が歩くと、近隣住民から苦情がきます。Aを歩くのではなく、Bを歩くようにしてください”を守っている。その理由は、(大げさに言えば)統計的に分析した結果、次の(a)~(c)のことがわかったからである。以下AをAルート、BをBルートとする。

- (a) 確率的視点：Bルートは車に轢かれるなど交通事故に遭う確率は、ほぼゼロである。Aルートも规则的には交通事故には遭わないはずである。しかし、イライラとしている運転手もいるかもしれないので、注意した方がよい。
- (b) カロリー消費：Bルートを歩くと万歩計のステップ数を稼げる。Bルートの方が少しだけAルートより距離が長いためである。ステップ数を稼ぐと、万歩計から歩数が少ないと叱られる心配がなくなる(私の万歩計はSNSへとリンクしている)。日頃から歩くという習慣を持っていると、健康にもいいし、環境に優しい行動へつながる。
- (c) 歩行時間の変動：Bルートを歩くと歩行時間がいつも一定である。Bルートの方が距離は長いのであるが、Aルートのように信号などが無いため歩行時間に変動が生じない。

さて、多くの人は(a)や(b)には気がつく。この二つはダイエットなどでも利用されている『行動経済学』[3]の知見をつかうと上手に説明できるであろう。しかしながら、(c)には気がつかないことが多いようだ。これは平均待ち時間を減らすための方法の一つで、『待ち行列理論』[4]におけるポラチェック・ヒンチンの公式で簡単に説明できる。高速道路ETCによりゲートでの渋滞が減少したのと同じ原理である。

地方大学の学内掲示であっても、この時代は世界につながっている。今回示したように確率、カロリー消費、歩行時間という視点で

Bルートのメリットを考えると“Bを歩こう。Aよりも総合的に優れています。”あるいは“Bを歩こう。その理由はココ(QRコード).”というパターンの掲示に変えることができるのではないだろうか。

John Mansfield 曰く“この地上において大学ほど美しいものはない”である。場所にふさわしい掲示が似合う気がするし、そんな掲示を通じて大学の素晴らしさを、生徒さんにわかってもらえたら良いのではないだろうか。JFKが大学について述べている演説を引用して、このエッセイを終わりにする。

“この地上において大学ほど美しいものはない。(John Mansfield)”彼の言葉は今日でも真実である。しかし、彼は建物やキャンパスの緑、蔦で覆われた塀などの美しさを語ったのではない。彼が大学の美をほめたたえたのは、彼が語っているように大学とは”無知を憎む人間が知識を得るために努力し、真実を見たものがそれをしらしめようと努力する場所だからである”(JFK, Commencement Address at American University, Washington, D.C., June 10, 1963)

参考文献

- [1] トム・ヴァンダービルト, 酒井 泰介, 『となりの車線はなぜスイスイ進むのか?—交通の科学』, 早川書房, 2008.
- [2] 堂山昌男, 『青信号はゴーでない—永住してみたアメリカ 行って見た世界』, 内田老鶴圃, 1990.
- [3] 池田新介, 『自滅する選択—先延ばしで後悔しないための新しい経済学』, 東洋経済新報社, 2012.
- [4] 佐藤健一(編著), 奥田隆史, 『新インターユニバーシティ: 情報ネットワーク』, pp. 75-114 (第7, 8, 9章), オーム社, 2011.